ローザ、アルトフォン、ケインリッヒの笑えない旅

たむつう21

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ローザ、アルトフォン、ケインリツヒの笑えない旅

【Nコード】

N1395I

【作者名】

たむつう21

【あらすじ】

生まれた星を失ったまま放浪する王族の姫に次なる運命が待ち受けていた。

艦内スキャンモニターに城のような建物をキャッチした。

「ロリ、アキシロ空城が見えてまいりましたぞ？」

「伯爵、適当なことを言わないで、生物の反応があるわ」

「えっあっ・はっはっはっ、これは一本まいりましたな」

ロリはモニターをにらんだまま動かなかった。たしかに城と思しき輪郭から生体反応のオレンジ光がまたたいている。

宇宙を旅するローザ、アルトフォン、ケインリツヒ、通称ロリとネッカーシュタイナー、ハイデルベルク伯爵、通称ネッカー伯爵は宇宙塵の激突をさけて近くに見えた星に船首をむけ下降していた。

彼女の乗るスペースシップは長年の航海を物語るに相応しくいくつもの
損傷を受けていた。すでに兆速で浮遊する宇宙塵のいくつかがシッ
プを

突き抜けていて艦内のいくつかのブロックは閉鎖されている。

それでも少しずつ艦内気圧が今も減りつつある。

「だけど、星にたった一つの生体反応っておかしいわね？」

「ふむ、ロリはどう考える？」

「あんだ、いつもそうやって私に任せるじゃない」

「そうでしたかな、フン」

ネッカー伯爵は気難しそうに自慢の口ひげを指でつまむとパイと横を向いた。

これでもネッカー伯爵はロリの保護者であり執事でもある。

戦乱に明け暮れたある日、ロリの故郷の星が吹き飛んでしまったのだ。

その時、ネッカー伯爵は仕えていた王室の一人娘を連れて宇宙に逃れて以来、

ここまで放浪してきたと言うわけだ。

「伯爵、大気に入るわよ」

「ラジャー、こりゃあ濃い大気ですな？」

「ええ、全てが灰色に見えるわ」

シップが轟音とともにバランスバーナーを噴射しフラップが作動すると

まるでクジラが顔を海面に覗かせるような体勢で地上に着地した。コンタクトエレベーターが真下に伸びると二人が地上の土の固さを確かめるように足を一歩踏み出した。

「ほほう、暑くもなく寒くもなく、快適ですな。こりゃゴルフ日和だ」

ネッカー伯爵は古代スポーツに詳しい。そこでスイングの真似をして無いはずのボールの行方を追った。

前方にはぼんやりと大きな影がたゆたっている。ロリとネッカー伯爵は頷きあうとその影にむかって歩きだした。

影に立体感のある濃淡がはっきり見えてくるとその城の大きさが際立っていた。

「ロリ、やはり城です」

「ええ、おおきい・・・」

「ふむ、堀があつて跳ね橋とは、ふむむ、我らの故郷の城に似ておりますな」

「ええ、・・・おかしい・・・イメージ通りに現れてくる・・・」

ロリは腰に吊るした剣に手を伸ばした。ロリの剣はスペイン十字が入って

いるがそれには関係なく先祖伝来の剛剣である。普通の者では扱えないほどの重さだがロリは軽々と扱い、彼女の意思にあわせて剣先が伸びる。まさに無双の剣でもある。

「たしかに、思った通りに出てきますな・・・姫、またれよ。わしが先に渡るぞ」

ネッカー伯爵が姫と呼ぶ時は冗談ではないと言う意味だ。跳ね橋を渡りだすと木の拉ぐ音がこだまして、二人は緊張した。ロリが何かに気付いた。

「伯爵！！」

「うぬ、殺気！！」

ロリの悲鳴に似た声とともにどこからともわからない場所から突然黒馬に乗った騎士が現れてネッカー伯爵を襲った。

騎士の槍とネッカー伯爵の剣が金属の甲高い音をたてて火花を散らしたが槍が高く弾き飛ばされて跳ね橋を支える城壁に打ち当たった。

しかし騎士は手綱をひき体制を立て直すと腰の剣を引き抜きざまにネッカー伯爵を襲うように見えた。

ところがあるうことかネッカー伯爵を通り越しロリを襲いかかった。

「姫えええ」

「こしゃくな・・・イヤーーー」

ロリが息をつかせず馬上より高く飛び上がると自慢の剛剣を引き抜いて

一刀両断に馬もろとも騎士を二つに割った。

血飛沫がとぶ。一瞬の静寂と安堵する伯爵のため息。

「いやはや、相変わらず手加減を知らぬ」

「何よ、手加減して助かると思ったの？」

「いやいや、お勇ましいと言ったのです」

ネッカーが感心するようにロリをたしなめていると城門が古金を擦り合せた音を響かせて左右に分かれた。

「伯爵、入っていいみたいね？」

「さよう・・・ロリ、油断と男には気をつけられよ」

ロリは男と聞いて目が輝いた。

「へへ、男？」

「最近色気づきましたな？」

「いやん、そんな目で見ないで」

ロリがしなやかな肢体をくねらせたのでネッカー伯爵が苦虫をつぶした顔になった。

ロリは楽しくて仕方のない少女なのだ。

「まったく、……ささ、進まれよ、相手を待たしては失礼ですぞ」
……続く……

(後書き)

お気軽にお読み下さい。 ^ ^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395i/>

ローザ、アルトフォン、ケインリッヒの笑えない旅

2010年10月28日07時18分発行